

ミャンマー・マイクロクレジットプログラム

鎌倉ロータリークラブ 会長 久保田英男

鎌倉ロータリークラブでは、二〇一〇年に AMDA 社会開発機構の協力を得てミャンマー中部メティラ郡グウェ・タウク・ゴン村でマイクロクレジット事業を開始し、翌年に同郡ニヤウン・コン村で同事業の追加支援を始めた。

とした社会開発事業を行う特定非営利活動法人 (NPO) であり、アジア・アフリカ・中南米で活躍している。

マイクロクレジットは、バングラディシュ・グラミン銀行創始者で、ノーベル平和賞受賞者の M・ユヌス氏が考案した、少額融資システムである。特徴としては、極少額融資で個人ではなくグループに貸付けるところなどにある。

ロータリークラブ (RC) は世界二〇〇か国に二〇万人の会員を擁する奉仕団体である。鎌倉にも三クラブあり、約一〇〇名の会員が、地域では献血や少年サッカー大会・野球教室などの奉仕活動を行うほか、このような国境を越えた活動も行っている。

AMDA 社会開発機構は、岡山県に本部を置く、開発途上国の地域の発展と、人々の生活の向上を目的

としても、「ビルマ」と言った方がしっくりくる方が多いかと。

神奈川県内の数 RC では、鎌倉 RC 同様にミャンマーで様々な奉仕事業を行っているクラブがある。例えば、鎌倉中央 RC は同じメティラの公立病院小

児病棟の給食プログラムの支援を、藤沢を拠点とするかがわ湘南 RC ではマイクロクレジット事業の他、その公立病院に新生児黄疸検査機を寄贈している。

これらメティラ郡周辺で実施中の事業を視察するため、県内三クラブ四名で、昨年十一月に向かった。僕にとつて、二〇一一年以来、二度目の訪問である。

最初の訪問で、ミャンマーが好きになった。正確にはその『人々』だろう。穏やかで、明るく、力強く働き、たくましく生き、そして、何より正直な態度に深く感動した。大都市ヤンゴンですら、わずか十数円のお釣りの渡し忘れの為に走って追いかけてくれる人が住む国なのだ。

事業を展開するメティラは、さらにのどかな田園



2011年、ニヤウン・ゴン村のモヤシ栽培をしている家族を訪問。その家族 (写真右。左は筆者とモヤシを栽培する壁 写真左) まだ壺も小さかった。

風景が広がり、時がゆったりと流れているのを感じる。

ここで行われるマイクロクレジット事業は、五人でグループを組み、日本円にして約五千元を借受け、それぞれ希望する事業で収益をあげられるように、現地 AMDA メティラ事務所のスタッフで、月一回行われるミーティングで、商業農業畜産に関する指導を行う。ほかに、保健衛生健康向上の講習会なども開き、受益者をサポートする、というシステムである。

先に支援を開始したグウェ・タウク・ゴン村は、土地所有者も多

く、八割が農業や畜産事業を行っている。一方、ニヤウン・ゴン村は、土地を持たない世帯ばかりで、したがって耕作できず、商品を仕入れ市場で小売りする人が多かった。他のクラブが支援する村などと比較しても、この村は事業の選択肢が極端に乏

しく、前回の訪問でも僕の中では、心配の残った村だった。しかし、両村とも現地AMDAMメテラ事務所スタッフの努力もあって、事業は順調だという。今回は市場での商業視察、病院訪問、小学校の式典、数村の訪問を行う、かなりの強行軍であった。両村を訪問したのは最終日で最後がニヤウン・コン村だった。実は当日まで訪問の許可が出ていなかったが、現地スタッフの努力で急遽訪問が決まった。

小さな集集場に全員が集まっていてくれ、再会を果たせた。

若い夫婦は夫のバイクタクシーを支えることが出来た、と嬉しそうに語り、また別の女



今回の訪問で立ち寄った集落で。家畜も生活には欠かせない。

性は果物を仕入れ街道で小売りして、家族を養ってきたと言う。そして、お礼がしたいから、と商売用の果物を沢山くれた。



ニヤウン・コン村の子どもたち。みな澄んだ目をしていて。

陽も完全に落ち、街灯のないこの村は完全な暗闇になった。

車に戻ると、母娘がそこに待っていた。「私の家にも寄って」と手を取った。粗末な門、どこか見覚えのある佇まいだった。そこを抜けると、大きな素焼きの壺が転がっていた。三年前も立ち寄ったモヤシ栽培の家族だった。土地がなくても栽培できる、とても賢い発想だと思った。その時は、小さな壺一つ、僅か

家族を思い、村を愛し、助け合う、感謝の心を忘れない。僕達が、喧騒賑やかな日本で失いかけている大切なものに光を当ててくれた。感謝するのは、僕達の方だ。



3年前に立ち寄ったモヤシ栽培をしている家族と再会、大きな籠にたくさんのモヤシが並んでいた。

この三年、ミャンマーは激変してきた。民主化が加速し、外資も増え経済成長はアジアで一番かもしれない。



村へ通じる道路

い。喜ばしいことだと思っ。しかし、その反作用もケアしなくてはいけない。実際ヤンゴンでの印象は、前回訪問時と少し変わった。

何かを得ることで、失う事は仕方ない、とは思われない。私見だが、「変える」「残す」「伝える」をバランスよく保つことで、民族とその文化は采えるのだと思う。僕達が見たメテラの人は、このプロジェクトを利用して「生活を変え」「家族を守り」「村の平和」を描いている。得るものはあっても、失うものなど考えてもいない。だから、皆笑顔なのだろう。その微笑で今度世界を変えてくれる日が来るかもしれない。